

復活（12）

1.天体規模の負の原因が浄化され得る時を、遙か未来に放ち、太陽系の外側を、この地球発の原因を基に宇宙本来へとその姿を変え得る可能性を生み出した、「復活」の EW。生命たちは、風通しの良くなった太陽の記憶の中に入り込み、太陽時間を旅して、太陽が一番楽だった頃の地球に行く。そしてそこで、太陽の光を全身に浴びて、喜び一杯の地球と遊び、その生命力の原因をそのまま自らと融合させ、その経験をこの時代に持ち帰る。それは、地球本来の地磁気のその誘い水となる。

この今の原因(の性質)が全くこれまでとは違っているとしても、形ある部分(現実)がそれと重なり合う時までの時間は、どこまでも思考の外側となる。それがここでは、地球規模の変化をテーマとするゆえの、軽く人間時間を超えてしまう時間となるので、そのこと(その原因の変化)を実感の域に収めるのは、限り無く不可能。であるはずのことをどういうわけか可能としてしまうという、その原因をここで創り出す。理屈は単純である。ただかつての病んでいなかった時の地球の地磁気を、自らの生きる原因の中に取り込めばいい。

思考(手法 etc.)の次元には無いその EW は、すでに始まっていて、無有日記と共に歩み続ける人のその原因の中に、それは流れている。特に何かをしなくても事の原因を変え得る

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

ことを普通とする人の中で、それは生き、それまでとは異なる次元の変化を何気に覚える中で、そうであることを実感する。そして、人間の、生命としての多次元的な可能性を見る。

「復活」の世界で自由に生きる生命たちは、地球が経験しなくてもよかった原因のその巨大な負のかたまりを透過して（突き抜けて）、太陽と密に、自然に融合していた頃の地球の磁場と触れ合う。その経験の原因が、望むべく形として具現化する。

2.地球に生きる生命たち全てのその生の在り様を、温かく見守り、永遠の変化へと導く地球は、そのための手段として、磁気を活かす。地球の中心から全方向へと流れる（走る）それは、重なり、回転し、増幅・拡大しながら、空間を包み、全てを生かす。必要に応じ個性的にその質を変調・変動させながら、どこまでも微細に生命活動への働きかけをする。

その地磁気（磁場）との融合を手にするというのは、この地上での一生命としての仕事の次元を高め、人間が為し得る地球への支援の質を最大級に強めるということ。地球の外側から降り込んだ不安定な粒子（宇宙線）を生の基本とする人間と、彼らによって作り出された非地球的な物によってその力を弱めることになる、地球の磁気。11章で、それらの原因に触れ、太陽を元気にする程の時を共に過ごしたからこそ可能となるここでのそのEW（融合）を、普通の域の自然な感覚のそれとする。

を、好きなだけ、自由に生きる。(by 無有 12/29 2018)

その時、心身は、身体レベルの世界(次元)から大きく離れたところでの、時空を透過して生じる変化を感知する。もちろん、体にも頭にもそれは現象として起きるが、その始まりは、身体経験の記憶の域ではない。それは、(停滞と腐敗を生み出す)歪な物質が一切存在しないかつての地球での、そこでの空気と水と太陽に包まれることで経験できるような、人間本来が元気になる流れでの感覚。体の中では、そこに居づらくなった不穏な性質の水素や酸素、炭素などが力を無くし、ただそのままで、生きる原因は力強くなる。

3.その意識もなく変化する原因に包まれる中、生命を生きる人間は、いつしか思考世界に絡まれることなく地球の磁気との融合の主導権を握り、気づけば、自らの存在の質は、人間という身体でいながら、磁場のような原因の仕事を担うようになる。そして、地球の意思に案内され、彼が地球らしさを自由に生きていた時のそこでの健康そのものの磁気を取り込み、更新する。この現代の人間時間に、地磁気が癒される。

動物たちは皆、地磁気を感じて生き(活動し)、クジラは、地磁気に沿って回遊する。人間も、本来はそう。動物のようにそれを感知する(見る)力は無くても、地磁気の影響を受け、その自覚もなくそれに反応して生きる。ただそれが、それを不要とする存在によって力無くさせられてしまっただけ。

磁気は、流れる電流の作用によって生じ、地磁気は、地球規模で流れる電流と言える。その地球の磁場が生み出す磁

界の中に居る、自然界の生命たち。彼らは(人間も含め)皆、地球の磁気を帯び、体の中で(微弱な)電気を流す。この地球に住む生き物は、それがどんなであれ、磁性(磁力)を持ち、(脳から発せられた)電気信号で活動する。

それを知れば、心身の不調は、体の中の電気の乱れによるものであることが分かる。そしてその前段階には、磁気の不健全さと地磁気との融合の不自然さが在ることも理解する。栄養素も、水や空気の質も重要だが、磁気が弱体化、電流が鈍れば、何をしてもどうにもならない。

4. 太陽の負荷が外れ、地球の生命力(磁場)が復活する流れへとその力が強まっても、そのためにかけた時間とその原因の成長に見合った風景の訪れを待っているわけにはいかない。地球が望み、動植物たちが何より欲するのは、自然界の生命たちを苦しめる、人間優先のその非生命的な思考の浄化。地球(太陽系)のためのこの今の原因づくりの中に、僅かの間に地磁気を弱体化させる程のその非生命的な思考を力無くさせるという経験を重ねる。太陽も、非宇宙の意思に支えられながら地球に無くていいもので生きる存在たちの、その動きの無い(地球が辛くなる)原因への処理を切に願う。

それへの動きが目に見えて進行する時、時代は、地球時間に人間時間が吸い込まれるようにしてその密度を高め、時は、数年(数十年)で事が大きく変わり得るという経験をする。つまり、地磁気との融合は、それだけで、人間の知を遥かに超え

は、いつのまにか、それまでとは大きく違っている。

思考では触れ得ない次元との融合を、思考の質を変えつつ、それを普通に、太陽系の各天体や、その外側にまで自由に旅をしてきた、これまで。向かわずに居るそこでの普通は、求めずとも縁する(引き寄せられる)世界を変化に乗せ、望むべく未来の原因を確実に変える。その原因の変化(の EW)は、地球時間をも癒し、この自然界を地球と繋ぐ。

ここまで来たからこそ普通に出来ることの世界に、これまでの価値概念は近づけない。何のためでも、誰のためでもなくただ生きることが全てのためとなる、地球感覚を普通とする、その原因のままの生。その本来を、ムリなく自然に生きる生命たちが、人間世界の次元を更新する。彼らを中心に時は流れ出し、空間の質も、地球本来のそれになる。

その時になって初めて経験する、普通本来のありのままの風景。動物も植物も、さらりとそれに合わせ、初めからそうであったかのように、優しさと温もりを普通とする。人間もそう。初めからずっとそこに居たかのように、不調も争いも無い平和そのものの時代を生きる。そして、安心と健康の他は何も無い生命としての原因を、みんなで重ね合う。

この地球において、一度切りの、この時代の、ここでの時間。それがここに在るから、これからは、これまでとは違う。数千年、数万年と時が経つにつれ、地球は地球らしく、太陽系は元気になる。月もその表情を変える。ここで育んだ原因は、未来のどんなところにも届き、活かされている。そこへと続くこの今

む、人間の知を遥かに超えた意思が、この無有日記を通る。変化し続ける永遠の原因(今)に付き合うそれは、ここでのEWを普通とする生命たちのその表現力を、次第に時代を修正・浄化するものへと変えていく。人間の思考では何をしても触れ得ないその粒子への対処は、何もしなくても自らの原因を成長させつつ、時の原因を変え得る彼らによって、それは遊び心の域となる。それは普通だから、広がる世界も、深まる次元も、限り無く自由である。

質量を持たない重力(重力子)が本来のそれへと変わり行くという、地球にとって何より嬉しい、生命世界の原因。それと融合すれば、どんなものでも、その原因から浄化される。この地球に在るものはその全てが質量を備えるから、力を取り戻した重力子は、そこに在る不自然・不調和の原因が癒されるその時に、元気よく協力する。それを待っていた、太陽系の仲間たち。地球の自転も、公転時の姿も、彼らが安心を強めるその原因として、変化に乗る。

9. 人間が感じ取り、実践し得る次元においては、底の部分にまで辿り着いた感のある、この15章。この後は、どんなEWを行っても、必要に応じて自動的に粒子の次元を絡め得るものとなるので、心身の状態の底上げも安定する。

そして、そこから、細胞(内臓)、心身、関係性、環境…と、これまで通って来た世界へのEWを新たな気持ちで楽しむ。原因の質の変化をテーマとするその(身体表現による)影響力

た原因の働きかけ(意思表示)が為されるということ。だから、EWを重ね、動き、その質を成長に乗せて、楽に変化の時を楽しむ。無有日記は、それをムリなく自然に具現化させる。

地球の磁場が不自然さを覚えた時以来、この地球では一度も無く、ほんの少しもそうであることが形になることは無かった、人間と地磁気との融合。その影響は大きい。そのことがここで生まれるという意味は、そのことによる反映が教えてくれる。地球を力強くするために、地球(磁場)を活かし、太陽をより元気にするために、太陽の光と遊ぶ。そして、人間時間を存分に楽しみ、人間世界を変える。生命たちの体験的知識は、自らが磁場となることで、その普通を一気に進化させる。

5. 体内の電流の流れを活発にし、血液や神経の流れも健全な状態へと向かわせる、地磁気との融合。しかし不思議なことに、それを不要とする存在が居て、その実、彼らによって自然界は病まされる。そこでは当然のようにして、生命本来(自然界)に背を向けた、生命力の無い食物(精白された穀物や肉類 etc.)が生きる力とされ、思考も感情も、動きの無い結果(過去)に居座る。

地中(地球)からの生命力を遠ざけ、土に還らない原因を生きる姿勢とするその存在たちは、そのことがそうであることを表すように、体内の電流の次元も普通とは異なる。つまり、地球に住む一生命としての人間の基本を彼らは持ち合わせてはないということ。普通では考えられないことだが、この地上

には、地磁気を生の土台とする人間と、そうではない人間が居て(その本質の違いによる在り様は「再生」に在る)、後者の生の在り方が主導する歴史の上に、この今の文化や価値観は在る。

その信じ難い事実も、これまでの無有日記の内容と、そこでの表現(実践)のその反映などに照らせば、分かり得ることだと思ふ。地球の磁場を不要とするその生態は、そのまま地球の負担となり、彼らによって作り出される物を通して、地磁気は弱化し続ける。

その非地球とも言うべき停滞型の原因の電気(電流)は、静電気の内実のそれであり、それは、太陽が本来の力を削がれた時、地球内に入り込み、存在感を手にする。静電気は、動きの無い原因を安定させる、不安定な滞りの電流。非生命的に存在し得るその力として、非人間性の燃料に利用される。

6.印象としての人の思考に住み着くそれとは全く次元の異なる性質と能力を持つ、静電気。それは、どこにでも在り、停滞と破壊のためであれば、どんな風にでも、その力を拡大させる。電気でありながら、純粋な電気とは呼べない(流れずに移動する)それは、本来無くてもいいものの在り様を支え、この地上には存在しないはずの不穏な生き物のその源でい続ける。

実に漫画のような話だが、不安や病氣、争い事などを前提とした価値観の中に居る人は、脳が静電気で動いていると考えてよい。健全な違和感や生命本来からなる感性のその原因

を持つ原子核が在る。

その中の一つの、非地球そのものの特殊なクォークを処理する。それを普通とする程の EW をさらに進める。無有日記は、ずっと前からこの時を知り、そのための原因の道を、向かわず求めずに確実に歩いてきている。

8.不調和な原子(核)のその陽子・中性子の構成粒子としてある、13種のクォーク。その中に潜む、非地球の意思そのもののクォークは、世の病みの主のようにして、他の12個とは大きくその質を違える電子($\times 1$)を操り、彼に、好きなだけ破壊と停滞の仕事させる。不自然で非生命的な(陽子と中性子の数が異なる)原子核を持つ物質に汚染され続ける、この地球自然界とそこで生きる生命たち。その地球時間に相応しくないクォークの本質を砕き、非地球空間を浄化する。

地球のこれからのために、そのままにしては置けない、その歪な原子の世界。それへの EW は、そこに在るクォーク($\times 1$)と電子($\times 1$)をひとつの場所に招き、まとめて(融合させて)その原因を無有日記で包み込んでしまえばいい。彼らの全てを知る、無有日記。両者の関係性(のその原因)の弱点は、そこに在り、ひとつに合わさることで、それは脆さをさらけ出す。分子・原子の世界の変化を感觸の域に収め得る生命たちは、いつしか、そのことを普通とする。(その EW も、対処し得る次元へのチューニングを更新するようにして変化し続ける)

(別次空間への)感応・感得の次元さえも余裕で包み込

気づけば、陽子や中性子のその構成要素となる素粒子の世界で遊ぶ。道案内をしてくれた友人(光子)も、時々顔を覗かせる。

クォークと呼ばれるそれは、そこに 12 個(種)在り、皆楽しそうに、この無有日記と遊ぶ。ところが、その場を囲むようにして迫り来る、別な世界からのクォークが次々とそこに入り込み、遊びのジャマをする。彼らには、13 個(種)ずつのクォークが在り、それを見て、この今の原因は、電子の時(例)を思う。12 個のクォークは、水素 2 の原子核(陽子、中性子)であり、13 個のクォークは、水素 1 のそれである。

この人間世界における病みのその最奥に在る最小の原因が、その 13 個のうちの 1 個のクォークである。思考の次元には決して姿を見せないそれは、地球次元の営みを弄ぶかのように、不自然さを喜び、破壊と混乱を愉しむ。限り無く不穏な原因で居続けるその粒子のために、地上の世界では非人間性がはびこり、心ある普通の人は、そうは思わせない心無い人間によって不自由さを強いられる。動植物たちは皆、どうしていいか分からず、本来を忘れさせられる。

健全な感性と心ある原因を普通とする人の、その体の重たさは、破壊力を持つ静電気や静磁気の居場所となる水素 1 を元に生じ、歪んだ重力子や電流の流れを材料に、理由も分からず、時を選ばずに起きる。それをどうにも出来ない人、どうかしてもまたそうになってしまう人のその細胞の中には、無数の水素 1 の原子と共に、13 個(種)という不安定な数のクォーク

に反応するそれは、秘めた感情の動きに刺激されて熱を帯び、人の脳に害を及ぼす攻撃的な原因へとその姿を変える。どこに居ても、そんな人は、静電気の破壊力を活かして、理由の要らない平和や健康の材料を潰し、都合良く問題事を引き寄せる。その見えない負の威力は、人間を通して地球全体が不自然さそのものとなるという、その有ってはならない現実を生み出していく。

電子機器に囲まれ、電子音や電子画像(and LED 照明、IH etc.)に触れながら安心を手にするその存在たちは、電磁波によってもたらされる静電気脳を強め、自然界への無感覚・無責任を地で行く。地球に居ながらして、地球を無視するという、その歪な生の原因となる静電気。それを元に心ある風景(のその原因)を壊し続ける彼らの普通は、地球の脅威となるもの。何よりも浄化されるべき原因のそれとして、地球は、その変化を望んでいる。

7.磁場があると(出来ると)、電流が流れ、電流が流れると、磁場が出来る。つまり、磁場には、電場(電界)という時空が同一・同次に存在し、それは、この地球の中心(鉄成分エリア)では、地球全体を活かす程の生命力のそれとなる。人間の生の土台も、それである。

その地球の磁場(磁界)を無視できる静電気という存在。そのあり得なさは、元々それがこの地球には無かったことを意味し、それによって地球自然界がどこまでも厳しい経験をさせら

れている(その生命力を削がれている)ことを表す。非生命的な活動のその姿無き強力な材料となるそれは、実に意外な場所に支えられ、維持される。

その源泉とも言うべき、静電気(静磁気)の元であるが、そこには、磁場を尽く潰された月が絡む。月は、生きる(自転する)意思を壊された時、太陽本来の力を削ぐ程のある非宇宙の威力によってその磁力(の原因)を操られ、太陽系内のどこにも無い非生命源の極みのような、流れない電磁場を持たされる。生命世界の自由な動きを破壊する静電気は、そこと繋がり、外からの不安定な粒子(宇宙線)によって生じた不自然さの中で、不健全な原因を普通とする人間のその非生命的な無意識(の意思)の力となる。

普通感覚で進化し続ける「復活」の EW は、太陽と地球の活動をより活発にするために、人間による非地球的行為のその元となる静電気の意思を力無くさせる。月をそこから外して元気にし、これまでのようには行かない流れを加速させて、静電気が存在できない地球の、その原因を強くする。月も、本来(磁気)を取り戻す。

8. 中心や核、芯といった言葉を活用しつつ、その時々 EW で事の本質・本源となるその次元に触れてきたこれまで。その度にそれなりの感触(効果)を手にしても、地球自然界にとっては負担でしかない人間社会のその負の原因の蓄積が、物理世界にその反映を覚える程処理・浄化されないのは、まだ

導き出し、それに包まれ、浄化される。光子(電磁気の媒介)の次元も、その表情を変える。

7. 無有日記の EW を通して、細胞レベルの不調和な原因が浄化されるという、常識的にはあり得ない、そこでの普通本来の常識。それはその何でも無い働きかけが、分かる分からないの思考の次元を軽く通り抜けて、そこに在る、動きの無い滞りの原因にまで届いているから。体験すれば、それは普通で、形(結果)で固めた不自由な思考だと、経験の外側となる。

地球の本来のために担うものや、一生命としての役割によっても、それぞれに変化のプロセスは異なるが、その時、無有日記の原因は、必要に応じた密度で、細胞の最小粒子の次元を観察する。そして、そこに在る負の原因の蓄積具合や、その影響力を把握し、自覚・無自覚に拘らず、変える(変わる)べきところを変え、それを浄化する。その全ては普通。

そして、ここで改めて、人間経験における、そこに在る最小粒子(要素)の実を形にする。形ある身体細胞の次元では、それは全ての原因。人間による、地球の意思からかけ離れた不穏な様も、そこから始まる。無有日記の原因(次元)を普通とする人のその原因の中に、地球の喜びを重ね入れる。

重力子の世界に触れ得た経験は、彼の友人である光子の次元を動かして、この時を待っていたかのように、そのことは、人間の細胞深くへと、どこまでもこの今の原因を誘い、次元透過の旅をさせる。それは、滑らかな流れで原子核の中に入り、

の重たさ。その理由には、静電気や静磁気が容易に居場所を手にする水素 1 の存在があり、その動きの無い、変化を拒む性質の力によって、普通に人は、無くてもいい動きにくさを経験する。

感性や感度の鈍さの基となる水素 1 は、空気中では、停滞と腐敗を演出し、心ある柔らかな人の中では、不健康の原因となる。そんな中でも、元気で、健康的に生きる人間。彼らは、無意識のところで、重力子の健全さを歪めつつ、その力を押さえる中で生きる。自然環境が病めば病む程元気になるその存在たちは、不安や争い事に安心し、その負の原因を支える次元の意思と共に、存在そのもので、地上での重力子(重力波の要素)の本来を壊していく。

太陽の光が活躍できない水素 1 を元とする、歪な地上での空間。それを基に考える時、原風景では、13 個の電子を持つ不安定な原子に合う重力子が活動的で、12 個の電子のそれは、力無くさせられていることが分かる。そして、その姿を、無限分の一の原因のフィルターに通してみる。そこには、回転の無い(逆方向へと回ろうとする)、生命の奪われた重力子が居る。

これまでの経験と、体験的に高め得た浄化と創造の原因を活かし、ここでも、左回転という EW を活躍させる。それは、人間の次元がその原因へと働きかけ得る、ひとつの道。そのため理由も、理屈も要らない。ただそうであることの実践を通して、そこに在り続ける重力子の意思に触れる。彼らの本来を

その時ではないという時代環境の必要性と、そうなり得る状況のその力にまでその手前の原因が成長してないという事実がそこには在る。

しかし、状況がどうであれ、「復活」まで辿り着く。そこに不十分な感覚が在ったとしても、思考の質は、時空を超える程となり、事の理解も認識も、太陽系の外側までをもその材料とする。健康と安心の原因は力強くなり、滞りや不調などとの接点は遠くなる。

そして、ここで改めて、「復活(12)」の時に居て、地球感覚を基本とするからこそその EW で、望むべく存在の核(芯)に働きかける。この時の訪れを何より嬉しいその中心を、本来へと力強く変化に乗せる。全ては、この時のため。そして全ては、この時から。これまで以上に、求めず、向かわず、淡々とその時を重ね、時が変わり得る原因そのものとなる。

地球と月。それぞれの中心の EW を楽しむ。ただそれだけ。それは「復活」内のテーマ全てのピースが動き出す力。「再生」も一緒に回り出す。その原因に関わり、その原因の中に居て、全ての原因になる。

「復活」は、全てであるひとつの原因で、全ての中のひとつの全てを浄化する機会。その原因(中心)で居続ける自らの存在の質は、地球となり、月となって、そして太陽になる。「復活」と一緒になって、生命世界の恒星になる。(by 無有 12/11 2018)

復活（13）

1.いつ終わるかも分からない辛さを延々と経験し続けてきた、地球自然界。その大元が、太陽の動きをも不自由にさせる程の存在であるということが、そこで生きる生命たちから永いこと希望を奪う。しかしそうでなくてもいい現実のその原因の成長により、それは、変わる時を迎える。無有日記が在るといのは、そういう意味である。

力の入り方が際立つ、この時代の腐敗と無生命化の意思。どんなにそうであっても、それを具体化しようと動いているのは（動かされているのは）、所詮人間であるから、その心無い存在たちの本質をより深く把握し、それへの対処が大きく次元を超える（もの）であろうことによるこの現象世界の変化を、ここで促す。太陽系と、その外側から地球を観るという経験を通して、人の思考は、問題事の存在意義をその原因のところから脆くさせ得るとい、それまでの経験には無い次元の思考を普通とする。この 13 章で何気に知ることは、ただそれだけで、その力を拡大させる。

2.「再生」の中で、数万年前という言葉で表現していた、土偶の原型となる奇形出現の時期であるが、それは、3 万数千年前のことであると、ここで改めて認識する。そして、姿形は人間であっても、中身が全く人間のそれではない嘘の人間の誕

らによって、生命たちの生の原因と自然に融合していた地球本来の重力のその中身は、異様に歪み出す。

それは現在に至りそうで、誰にも、どんな手を以てしても分かり得ないそのために、‘時代は繰り返される’という、決してあり得ないその（生命にとって）低次元な姿を人間は繰り返してしまふことになる。地上に生きる生命にとっての、重力の質の変異は、受容し得る次元を超える。それでも、地球に生かされ、地球と共に居る彼らは、必要とすべくものを補われ、支えられながら、生を繋ぐ。

無質量であるために、捉えることも想像の域を出られない、重力。しかし、全てにとってそれは何より大切な要素。それが本来在るべき普通ではないとすれば、人間も動物も皆、そうとも分からず異常を普通として生きることになる。

そのどうにもならない重力であるが、思考世界に存在する言葉、重力子という概念を間口に、その中に入って行く。そして、重力の媒介粒子とされるそれを通して、今在る重力の歪さを感覚的に（多次元的感応として）把握し、それを EW に繋げる。そのための材料も、ここに集まる。

6.この地球に居て、その地球の重力との融合を基に形を持ち得た、動物と人間。そうであるから、彼らは皆、軽快さを普通に、自由に元気に動き回る。動きにくさや生きにくさは、そのどこにも無い。

かつての風景で、人間誰もが経験することは無かった、体

も同じである。

電気と静電気、磁気と静磁気の次元を包み込むようにして進化し続ける無有日記は、微生物の本質とも融合し得る原子世界の、そこに在る(2種の)電子の実にも普通感覚で入って行く。そして、そうであるいくつもの時を経て、そのことが誘い出す、次なる必然。それが重力である。思考の域に近づけることも至極困難な、余りに普通過ぎるその世界。形にも感覚にも触れ得ないそれは、地磁気の古傷のようにして、本来から遠いところに居続ける。

地球に入り込んで、そこに在る物質を変異させながら、重く流れない空間を次々と生み出した、外からの不穏な粒子(宇宙線)は、地球の磁力に負荷をかけ、そこに生きる生命たちの生の自由を不自由にさせていく。それでも本来を失わずに生きていた生命たちだが、永い時をかけて、そうとも分からず(地上の次元で)その質を微妙に変えていた重力の影響で、彼らの生の基本は低下する。それを受容し、ただそのままでいることで、動植物たちは生き存える。

地球の重力を無視する程の異常な次元(の原因)の中で形を手にした、蛇絡みの人間。彼らがこの地での生を始めた数万年前、地上で生きる生命たちのその土台となる(原子の次元の)重力の性質に、それまでにない異変が生じる。非生命そのものの原因をそのままに人間を生きる存在たちの、その脳(の原因)は、それだけのことをする。すでに蔓延していた、地上には無いはずの不安定な物質を生きる力(基)とする彼

生は、3万1400年前頃とする。

現代のこの国の、心無い感覚を普通とする人の殆どは、その嘘の人間から始まった(それと本質を同じくする)存在と思っただけで、自らの、ここに居る意味のその原因は、質(次元)を変える。そう、このおよそ3万年間が、その存在の決定打とも言える、人間を使った破壊の意思の具現の時である。

嘘の人間は(奇形も多く並行するが)、ある女性の3人の子(娘)を元に、時代を経て、何百、何千とその数を増やす。彼らは、この地上には無いはずの攻撃的(暴力的)な行為を普通に、他者の痛み(苦しみ)を食べ、不安定を喜び、破壊を愉しむ。純粋な(普通の)人間の姿は瞬時に嗅ぎ分け、本能のままにその生を潰し、支配する。現代も、その基本は変わらない。

3.その存在たちの無意識の意思は、理由の分からない不調(痛み、けが)や問題事を簡単に生み出す別次の意思と繋がっていて、個人や集団で、そうとは分からせず心ある柔らかな人の苦しみを作り出して、それを愉しむ。生の根源が、生命としての人間表現を尽く拒否するところからのそれであるため、そこに調和や友愛の原因は無く、自然界と融合する姿勢も持たない。時代背景に合わせて、意識の表層を自在に変え、不安や不公正の次元を好きなように利用する。

その始まりの場所であるが、当然今もそのままで、永遠にそれは変わらない。地上での風景は変わっても、嘘の人間の誕

生の地は、その重たい原因を重ねつつ、そうであり続ける仕事をし続ける。「復活」の EW は、その地に潜む非生命の経験の記憶を、その原因深くから余裕で観察し得る時を創り続ける。

この国の全ての歴史的病みの土台となる(蛇を経ての)嘘の人間の誕生の地は、東京西部の、縄文土器がいくらでも発掘されるある地域である。自然界の水と空気を破壊して、地球の無生命化を企てようとする意思は、その意をそのまま通し得る形ばかりの人間の具現を、3 万 1 千年程前に、現在の東京西の地で成す。

4. 人間世界には、本来在り得ない、不自然で不調和な風景。それは、地球にとってのあり得なさ、月が回転しないままでいるということと、その形無き原因のところで繋がっている。その地球にとってのあり得ない事実を自分のことのように感じる時、人間世界のそれは、違って見えてくる。結果として居座ろうとするそのあり得なさは、そうであろうとするその重たい原因を見失う。

そして人は、地球が知る、月の変わり様のその更なるあり得な原因と繋がり得る時を創り出す。自転が止まったまま何億年もそうである時を連ねる中で生み出された、月にとってのそのどうにもならなさ。それは、回ろうとする望みを繰り返し押さえ込むようにして、月の内部を狂わせる。その痛みと、そのためのその地球空間への影響は、「復活」で癒される。

地球から永遠に見ることの出来ない月の裏側。その永遠が

み出し、増やすことも、電子の姿で実を隠すその恐ろしく不気味な力は、強力にそれに関与する。

そして、その EW を通して、時代は、更なる好転反応のその原因の質を変える。それは、不安定が不安定なままとなり、嘘が嘘でしかなくなるというもの。その人の本質となる原因の質も、潜める(秘める)次元には留まれなくなり、そのままそれが本人となる。動きの無い結果や形式の次元に人は居ることは出来ず、そうでしかない人は、その危うさ(嘘、偽善)と非人間性を自らとして、繋がる場所を無くす。

思考の域にも、体験的知識の中にも収まる機会を持ち得なかった、原子世界のその原因の実。原子核は、あくまで性質と個性の次元であり、原子の仕事の中身とその方向性は電子である。その電子の数が、12 個と 13 個とでは、それは、変化と停滞、生命と非生命の違いを生み出し、後者は、放って置かれれば、それだけで崩壊と消滅を確実にする。

ここまで辿り着けた、「復活」。地球を元の状態に戻すためのそのプロセスにおいて、13 個(12+1)の電子を持つ物質のその非宇宙からなる原因は、そうとも分からずに、その力を無くす。すでにその場所を通っている。

5. 地球が要らない負荷を被ることなく本来でいることで、生き物たちは皆、健全さを普通に生を活躍させ、生命を繋ぐ。植物も動物も、地球の磁気と電気をその基本燃料に、変化し続ける生命の原因と地球空間の調和を支え合う。微生物の世界

も炭素 12 も、同様にそれぞれ 12 個の電子を持つ。健全さを普通とする粒子は、陽子と中性子を同数持ち、地球と一体化しつつ、自由に融合、合成しやすいよう、各自 12 個の電子を活動させて、調和ある空間を支え合う。

その調和を忌み嫌うようにして存在する、不穏な様の下地となる、水素 1 や炭素 13。それらがそうで在り続けられる原因の一つで、特に重要なのが、そこに在る 13 個の内の 12 個の電子が、水素 2、炭素 12 の電子($\times 12$)と同質であるということ。そのために、完全なる偽装が可能となり、嘘を本当に(偽物を本物に)、それらは、不自然・不調和をそうとは分からせずに生み出していく。水も空気も、おかしさを普通とする。

4. 太陽と地球とを融合させる、水素 2。宇宙の意思と繋がるそれは、地球に住む全てを生かそうとする原子核を備え、調和の取れた電子がその役を担う。

太陽を退け、地球を力無くさせる水素 1 は、その不安定度の基礎となる歪な原子核を元に、腐敗と破壊の原因を作り続ける。非宇宙の意思と繋がる不調和な電子が、それを(その具現化を)率先して行う。

不安定な力で安定を壊すことによって嘘の安定を維持する、地球の異物である、非生命的な原子。そのどれにも在る電子のその中の、破壊そのものの電子($\times 1$)を浄化する。その負の威力は、この地球における嘘の力の根源であり、非生命(非人間性)の重量級の原因である。心を持たない人間を生

外されようとするここでの原因の中、感覚は、太陽から見た月の裏側を取り込み、思考の質を大きく変調させる。地球が覚える、月からの形無き負荷の原因と、太陽が観察する、月の全体像。そこに、生命たちの、太陽の意思とも繋がる地球感覚が重なり、この時、月のその異常で不思議過ぎる事実が動き出す。そのことの知識は、地球自然界が望むそれへと人間世界が変わって行く流れのその原因の力になる。

5. 月という球体の、地球から見える側とそうではない側を半分に分けると、2 つは、その質を大きく違わせる。前者は、分からせない嘘。後者は、分かり得ない嘘。それぐらい、月は病みそのものとなっている。

自転の無さがおよそ 8 億年もの間続いていることを考えれば、その違いも当然のように思う。見える側の方の部分は、力無いながらも、そこには磁場と電場の原因の動きが在る。そのことで、地球のそれとの響き合いが為され、完全に物化していても、月は地球と共に居ることが出来る。それに反し、見えない部分には、何も無い。

その地球から見えない、月の裏側となる後ろ半分の世界(次元)であるが、そこに、地球に在ってはならないものの、その形無き原因が、その不穏な意思を重ね(強め)つつ永い間住み続ける。それが、12 章で少しだけ形にした、静電気(静磁気)の次元の原因であり、無生命化の材料となる歪な原子世界の不安定力も、その場所を、そのための重要な通り道とす

る。月は、どうにも出来ずに生じさせてしまった、後ろ半分(特にこの地から見て下部)のその質の異常さを、非人間性を普通とする人間による破壊の意思に利用され続ける。

そのことは、静電気脳のような状態で嘘の原因を本当として生きる存在たちのその負の活力源が、月の裏側に在ることを示す。人間世界の質(次元)を、地球に住む一生命としてのそれに変える時、月がどれ程重要であるかが分かる。

6.月の姿を通して地球の悲しみ深くに触れ得たら、月の気持ちになる。地球に生かされているという次元を思えば、人間にとっては、地球より、月の方が近い。月の辛く切ない経験のその原因が癒されるよう、何気ない発想からなる EW の力を進化させる。

月が公転するその姿を後方から見ると、右側は、地球から見えないところ。左側は、地球に届く月の光。その姿(左右)を月と共に歩く人間に当てはめると、右手(右方向)を主とするのは、動きの無い月の裏側(右側)との融合。左手を自由に使うのは、かろうじて磁場の原因を残す、月の表側(左側)と同質の表現。月に連れ添い、一緒に歩く。右(手)文化の中に紛れ込む、(人間世界特有の)不自然さを力とするその負の原因が、月の右側と重なっていることを知る。

月の自転の力になろうと、彼の公転に付き合うと、これではとても自転はムリと分かる程、左右のその違いの大きさに驚かされる。右は、静磁気(場)そのもののような、動きあるもの

数の)電子。しかしそれは、動きの無い思考の域からは自由になれない次元のもので、不調和や不自然さの原因が外された時に自然に姿を見せる、本来そこに在るべき原因を基に(その必要性として)形となって現れた、変化し続けるその中で形ある実ではない。不安や差別心、権威や優越からなる思考が少しでもそこに在れば永遠に感じ得ない、限り無く重要な原因の事実は、この地球自然界にはいくらでも在る。原因や電子の世界(次元)もそうである。

3.ヘリウム 3 の陽子(×2)と中性子(×1)とのその不調和な繋がり、調和そのものの無有日記の原因を融合させると、そのことに抵抗の無い電子と、そうではない電子が勝手に動き出す。前者は 12 個。後者は 1 個。そこには、合わせて 13 個の電子が在る。

水素 1 の原子核には陽子(×1)だけが在り、中性子は無い。そのため、陽子と電子との間に無有日記を遊ばせてみる。すると、なんとヘリウム 3 の時と同じ、13 個の電子が動き、その中の 1 個だけが、即座に身を隠そうとする。実にシンプルで分かりやすい、停滞型の粒子の内実が顕になる。

炭素 13 も酸素 17、窒素 15 も同じ。質量数は増えても、電子は皆 13 個。陽子と中性子の数が異なる非地球的な粒子(原子)は、13 個の電子を持つ。

そして、地球の意思と繋がる水素 2 の世界。そこには、他との融合の担い手として 12 個の電子が在り、仲間のヘリウム 4

止める)知識を溜めることは考えられない。

そして、一生命としての人間を生きる誰もが気づき、実践すること。それは、原因を生き、その質を高め、広く深く繋ぎ得る本来の普通を成長させること。不調も不自然も、衝突も不安も生まれ得ない原因を普通に、普通の人間を生きること。その人として基本となる生の、その原因に備わるべく普通が、無有日記であり、この「復活」である。

2.10 章で触れた、地球の異物となる水素 1 の世界。その割合の多さは、そのまま人間らしく生きることが難しくなる原因となり、動植物も、水も土も、永いこと本来ではない。

それへの対処は限り無く困難なものだが、その次元の知るべき知識をその原因深くから感得すれば、それをどうにか為し得る新たな機会は引き寄せられる。原因からなる知識は、原因のままに在る生命の知恵として、自由な表現力のその可能性(次元)を高める。

水素 1 とヘリウム 3 それぞれがそうであるその背景(土台)を、自由にどこまでも拡大させ得る原因のみの世界から観た時、それらの歪みの安定のために活かされている粒子は、中性子ではないことは分かる。陽子(の数)が主導する、それぞれの不安定の安定の、その強力な材料。そこに隠れるようにして存在するのが、異常を難なく普通とする程の独特な様を見せる、電子である。

固定された知識の世界に居座る、陽子の数に見合った(同

の活動源を潰し切る、冷たく非生命的な停滞の意思のかたまり。左は、地球の磁場へのかすかな反応を頼りに、ギリギリまで変化(回転)の原因を繋ぎ続けようとする、生命としての月の意思。伝わるそれぞれの原因のその性質は、衰退と希望、固定と歩み、そして黒雲と晴れ行く空。それをどうにかする。

公転する月を、あたり前にその後方から見る。そして、天体規模の異常さを生み出す程の負の原因のかたまりと化したその姿を、元に戻す。そこへの流れ(進化)無くして、人間世界に真の変化は訪れない。それは、変化し続ける原因がそうであれば、確実に人の居るこの地球環境全体が変わるということ。月の右側に在るその病みの原因とそれを通す(この地上での)存在たちとの間に入って、それが居場所を無くす程の EW を重ねる。ぐんぐんとそれを成長させ、月を元気に、地球を本来にする。

7. 自らの原因が何もせずとも空間を柔らかなものにする意思を普通とする時、知るべきことを知るそこでの経験(タイミング)は、そのことによる影響力を一層高め、時を変え得るその原因の仕事も、普通感覚で広がり、強くなる。これまでを基とするこの章での知識は、そのための力強い燃料源となる。

心ある原因を普通に生きる素朴な人が心身を病む時、その理由には、心ある振りしか出来ない人の静電気があると思っ
てよい。重く流れない価値観を普通とする人は、脳の働きを、この世には無いはずの静電気を頼りに、心(原因)を無視でき

復活（15）

る形式や知識(思考)世界にしがみ付きつつ、そうとは分からせずに非人間性を生きる。彼らは、健全で健康的な原因を備える人に出会すと、その無意識の意思(本性)が瞬時に反応し、見た目はそのままに、調和ある次元では異物となる静電気を活動的にし、相手の身体に理由の分からない痛みや不調を作り出す。

その時に自動的に為されるのが、月からの静磁気の供給。地磁気(からの生命力)を不要とするその存在たちは、自らの(脳)中の静電気を負の威力として有効に働かせるために、静電気と重ね合わさると強力な保持力を維持する、その動きの無い静磁気を、他者への抑え込みに活かす。普通の人、不必要な融合を強いられ、そこで静磁気(静磁場)を持たされて、原因不明の不調感を余儀なくさせられる。

何度もその存在たちの嫌悪(違和感)の対象となると、体(脳)の中に住み着いたその静磁場(界)には、いつのまにか破壊力を持つ静電気が蓄積し、見ただ目で隠された彼らの危うい意思(正体)が、それを操る。静電気が内なる感情(思考)と共に強く働けば、それは痛みとなり、静磁気(場)の密度が濃くなれば、体の重たさ(動けなさ)になる。

人の病気は、嘘の原因を生きる人の静電気と静磁場によって生じることを理解する。そして、それを知るこの時が、もうそうではなくなる時へのその原因であることも知る。地球には無いはずの病気の、その原因を浄化し、地球を安心させる。

1. 思考を動かし、頭を働かせ続けることで、内なる動きが止まり、脳の働きも本来ではなくなる、知識世界。期間(地域)限定の次元を出られないそれは、分かった気にさせて、何も分からせず、変化しているようで、その実、全く変化とは無縁の世界に人を居続けさせる。そのために、人は、いつまでも平和の原因を生きることが出来ず、問題事の存在意義を無くさせることもしない。それを人間と呼ばせ、人間らしさを放棄する。

太陽系の外側にまで思考を付き合わせたことで、いつのまにか自らの原因は大きくその分母を増やし、質を変える。分子(原子)や微生物のその在るべき姿(次元)とも融合したことで、多次元的に働きかけ得る生命としての原因は、その進化を普通とする。そして、地球が嬉しい原因そのままの知識を自由に扱い出し、生きる道具としてのEWにそれを活かして、余裕で時(人間時間)を変える。全く病んでない時の地球のその原因(の意思)が動き出す。

その時、結果に居続ける知識のその流れない原因は外され、常識とされることや尤もとされる価値観は、その真(本質)が問われることになる。病気や争い事の存在を前提とした知識(情報)が力を持つことは有ってはならない。結果(過去)を踏み台に向かう目的も、滞りのひとつの形でしかない。人としての変化を普通とすれば、人として要らない(原因の変化を

な融合を主導する。人間の世界は、自然界の安心と繋がり、その質を生命本来へと変えていく。時代の好転反応は、単に無くてもいいものが居場所を無くすだけの、誰もがそれを普通とする素朴なものとなる。

地球の頼みの綱だった微生物の復活は、そのまま地球時間の復活でもあり、それは、確実に太陽時間へと響き出す。各天体はそのことに反応し、太陽は、自転速度を速める。それに反応する地球は、地磁気をより力強く活躍させ、それにまた各天体が刺激されて、彼らと太陽との繋がり(融合)も密になる。そして太陽はより元気になり、いつのまにか、月も回り出す。地球は、どこを見ても、地球らしさを普通とし、生命たち全ての安心の場となる。その真ん中に、「復活」が在る。(by 無有 12/21 2018)

8.地球自然界での、その自然な生の在り様においては限り無く異物となる、動きの無い(変動しない)静磁気。その奇妙な影響によって人の心身が不調になることを考えると、それは、人間という生命でいながら、全く非生命的な物質をその生の原因とする存在(の本質)と融合するということが分かる。そこに 10 章で記した水素 1 や炭素 13 といった、地球には無かったはずの(放射線からなる)不安定を安定とする歪な原子が在る。

元々この地球には存在しなかった、不安定な(陽子と中性子の数が異なる)原子核。炭素 13 も酸素 17 も、その核は歪であるのに、どういうわけか太陽を不自由にさせる程の力を持つ無生命の意思によって、それらは(物質本来の)他と同じように物質的に存在し得る力を手にする。その不自然な無生命でいながら、生命の姿を持つ歪な原子の大元は、水素 1。生命世界の原因を破壊して、その全てを腐敗へと導こうとする存在は、そのための手段として、静磁気と水素 1 の陽子とを結び付ける。

どこにでも居て、どんな風にでも完全なるコピー状態を生み出す、水素 1 からなる無数の非生命的な物質(原子)。それは、地球感覚を普通とする人の中にも際限無く入り込んでいて、それらは、痛みや不調感(気力の無さ、動きにくさ)が理由も分からずに生じるその下地(静磁場)となっている。

しかし、そうはならない状況へのその原因の EW を確かにするために、ここに至る全粒穀物食はある。経験から自由で

いる生の実践に支えられた、そうであることによる人間時間の土台の修復は、この「復活」で、細胞深くからの変化のその基礎となる。

静電気と静磁気(場)の存在を把握し、それだけでも動き出す変化を自らの中に覚えたら、水素 1(の原子核の陽子)と静磁気との密な結び付きを切り離す。それは、心身を本来にし、と同時に月に生きる力を与え、太陽系全体に響かせ得る復活の原因を、この地球から発信することでもある。知ることが、そのまま原因の世界の実践となるようなこの時、地球規模の病みの原因が次々と力を無くす(姿を消す)生命としての道を歩む。それもこれも普通。普通だから、全ては普通になる。(by 無有 12/14 2018)

殆ど全ての人間の、その細胞の中で歪な状態となっている、微生物。電流や磁力線関わりの EW を通して取り戻した普通を基に、彼らの回転を本来にする。細胞レベルでそこへと動き出せば、彼らは走る。伝播の質も、その影響も人間の理解を超え、変化を見せる。彼らは、限り無くその分母を拡大させ得る、生命としての磁気。生命世界の普通が、普通に更新される。

8. 左も右も無い、変化し続ける生命世界で、変化が止まったままにいる、歪に固定された人間の思考からなる右回り(右回転)の次元。そのままであれば、自然界は、生命力をどこまでも削がれ、他の天体のように、この地球も腐敗へと向かう。人間にとっても、動植物たちにとっても永遠であるはずの地球時間が、そうではなくなる。

地球感覚を高めつつ、歩み続けるこの時、この「復活」の次元を大いに活かす。ひとつひとつの文章が案内する時空を漂い、通り抜け得るところは次々と通り抜け、繋がり得る世界とは自由に繋がる。そして、「仏陀の心」や「再生」を通して、今、「復活(14)」の時に居る自分を何気に想う。真の変化は、さりげない。

普通の質は、どこまでも自然に進化し続け、その原因の反映となる風景を通して、何もせずとも事(の本質)を変え得る体験は、面白さを増していく。そこに微生物が参加する。彼らが加わることで、時代は風のように時を運び、地球との滑らか

然界は、地球の意思と重なり合う。

静電気も静磁気も、微生物の変化を無視できなくなり、それまでのようには行かなくなる。地球に存在しないはずの歪な物質(粒子)も、彼らを付き合わせられなくなる。水も空気も土も、太陽の下で、忘れていた本当の顔を見せる。

7. 地表における、地球の意思表示のその具現化の仕事を行う微生物は、地球次元の分子と自由に遊び、思うままに形を生み出し、生命源(ヘリウムの原子核)からなる原因のその連繋の役も担いつつ、あらゆる生命が存在し得るその多次元的な生命力の基礎でい続ける。

そんな彼らでも、その分子の元となる粒子が(非地球的に)変異・変質したそのことには反応は出来ない。そのままそれまでのように仕事をし続ける彼らとの協力関係は、地球の歴史そのものだから、人間は、そのことにも対処する。中庸の原因そのものでいる微生物のその地球感覚の原点を大切にする。

生命本来の原因を持たずに非人間性を普通とする嘘の人間の中で、微生物は、その動きを操られるという、あり得ない経験をする。その存在たちの本質と彼らによって生み出されるその不穏な様については、すでに他で書いてきているが、その非生命的な次元に付き合わされる微生物は、何も知らず、何も出来ず、いつのまにかそうであることも分からずに、自らの分を見失う。それは永い時を経て繰り広げられ、この数百、数千年は、その危うさが際立つ。

復活 (1 4)

1. 地球に存在するものは、それがどんなものでも、かつては存在してはなかったという、それ以前の形無き時を経験していて、それらは全て、地球次元での必要性に合わせた生の原因という意味を持ち、その具現化への道へと自らを進化させる。それぞれは、そこで自由に分子(粒子)の結合と融合を重ね、微生物に支えられながら、形ある存在として地表の世界(次元)に姿を誕生させ、そして生の営みを変化に乗せる。物質も動植物たちも、存在し得る基本のところでは、その原因を地球の意思と重ねる。

地球でのその必要性が最初に高まったのは、太陽系内に大小様々な性質(放射性)の物質が降り込んだことで各天体の活動が大幅に狂わされた、およそ 33 億 5 千万年前。現在も、火星と木星との間に(木星の重力(磁場)がそれらの負の原因を抱え込むようにして)その時のままの姿が在るが、この時、太陽は初めて、それまでの創造のプロセスを阻まれる。地球は、内側、中心、外側近くと、天体維持にとって重要な物質(鉱物)をそれぞれの場所に誕生させ、その必要性に彼らを付き合わせる。

その時から 4 章の内容の地球環境になるまで何億、何十億年という永い地球時間が刻まれることになるが、植物、動物、人間と、その(生命誕生の)必要性が変わる中、その理由

となる不穏な背景に覆われる自然界は、それぞれの時に、地球の意思とその原因を重ね得ない存在の誕生を、負の奇跡として余儀なくさせられる。

人間誕生の理由とそれへの経緯については「再生」の中で触れたが、天体規模の影響を持つこの現代でのその意味の高まりは、そこでの事実(環境)全てが変革の原因となり得る程の重要な理解をもたらし、この「復活」の進行に、それは連れ添い続ける。そして、この14章の時を、これまでが突き抜ける。

2. 静電気と静磁気という次元の EW を通して人が感觸の域に収めるのは、食物や水によって生み出される、細胞の分子(原子)レベルの負の蓄積。それ無しでは無感觸のままであったであろうその理由は、より深くの次元の変化(浄化)を普通とし、反応もムリなくその質を大きく変えるもの。感情や思考(の記憶)まで、(そこに在る)原因の動きとしてその変化を把握し得る経験は、生命本来という普通自然体の生の在り様を力強くさせる。

地磁気からなる生命力(との融合)が自らの生の原因の中で活躍し出したら、左方向への回転を、普通感觸の大切な要素とする。それは、人間が人間でいるための、その基本的な実践の中に初めから在るもの。そのことで、地球感觸の厚みは増し、更なる変化の原因が流れ出す。

地球自然界でのそこでの生の原因には、人間の思考の次

た、その非地球的な人間の世界に、微生物たちは、その意識もなく添わされる。そこでの土に還らない、重く動きの無い負の原因(の姿)との共存は、彼らには初めての経験となる。

6. 地球の地磁気の分身として、生命たちへのきめ細かな繋ぎ役でい続ける、微生物。どこかで、この時の不自然さを感じながらも、それを受容しつつ、そのままの彼らは、そうでなくてもいい道が自分たちの本来であることを、この「復活」で気づかされる。今とは大きく違う、33億5千万年以上前の自分たちと、その時の太陽と地球。その頃の原因に触れた EW を通して、微生物は、初期化のような状態を経験し、彼らなりの再スタートを切る。地球と共に居る純粋な磁気として、新たな創造の時を、太陽に預ける。

人間世界関わりで、永いこと何がどうなのか分からない中に居る微生物に、そのままでは地球が辛くなることを教える。無有日記の原因と融合させ、地球の安心のその原因の時に、彼らを参加させる。そして、左回りの姿を思い出させ、そのことで変わり得る風景を、元気に支えてもらう。彼ら本来の磁気のは活躍は、健全さの原因を広く拡大させ、地磁気にも余裕をもたらす。

地球自然界は、微生物のネットワークで生かされ、支えられている。それゆえ、地球が嬉しい融合がこの無有日記によって為されると、彼らは、それを基に自然に繋がり、広く伝わり出して、空間を変える。そうである原因が高まれば、どこまでも自

は、環境や変異した物質に関わる中で備わった、彼らの個性。どんな状況でも、その全てを受容し、そこに在るものをどこまでも生かし、変化させる彼らは、いつの時代も、地球と共に居る。その姿は、地磁気(生命力)の分身でもあり、生命たち(生命体)の原因の力でもある。

地球時間の原点となるような、遙か遠い昔、強力な磁気のかたまりとなって地球に降り込んだ彼らは、太陽に守られて生きる地球の磁場に包まれ、地球と融合する。そして、地球の意思と繋がる場所に居て、地磁気と自らを重ねつつ、太陽の光を活かす。温かく迎えてくれた地球と共に、その独特の活動を以て、彼らは地球になる。地球の意思(知恵)に添う彼らのその磁気(生命力)の表現力は、後に、地球規模の必要性に合わせて、生命たちを生み出す。

微生物は、その本質が磁気であるゆえ、生命世界のそれと同様、左回り(左回転)を基本とする。左に回り続けることで磁気を保ち得、生命たちの活動に加わり、生命としての力を発揮する。地上では、生命力と生命体の中間のような位置付けとなる微生物。ずっと地球に居て、磁気として地球を守り、生命として全てを生かす。

その微生物の力をどんなことをしてでも封じ込めようとする、無生命化の意思。地球の歴史が人間の歴史を主に右回りに回り出した数万年前から、彼らの受容と連繋の意思には、そうとは分からせない程の不自然さが巧妙に入り込み、それは現在に至る。太陽の光と普通自然体の生の在り様が遠ざけられ

元が触れ得ない多次元的な融合と変化が、地球の意思との繋がり(重なり)を基に自由に為されている(活動している)わけだが、それを嫌悪する(静磁場の元となる)存在の意思は、大多数となった(土偶の原型をルーツとする)人間が内に潜めるその非生命的な本質を、非地球的な破壊の次元と繋ぎ、その働きかけを可能とする通り道として、人間の思考の次元に、右回りという負の原因供給の間口を作り出す。前後も左右も、過去も未来も無い、自由で多次元的な生命世界(の原因)は、その右回り(右ねじれ、右巻き)という、固定された動きの無い妙な世界に不自由さを強いられ、自然界の生命たちは、その生の根源となる中庸の次元との繋がり(負)に負荷をかけられ、厳しく辛い時を経験することになる。

3. 左か右かという直線的な思考が当てはまる次元は、自然界には存在しないが、右回りは、どういうわけか、人間の生の在り様を地球から離し、左回りは、理由は分からずとも、そのことで地球に近づく。自らの変化し続ける原因が地球感覚のそれであれば、左回りは、地球との融合を力強く応援し、細胞たちの働きも活動的になる。なぜそうであるかの原因は、そうである経験を通して、人間の思考の外側で自由に広がり、増大する。

その原因の世界から観た時、地球の生命力は、人間の左回りと融合する。そして当然の姿として、右回りは、地球の磁場を遠くに、静磁場(気)を自らに引き寄せせる。ただただその事

実が先行し、体験的知識の質の高まりだけが、その原因の世界が動く多次元的理解のそれとなる。

地球の普通を避けるようにして、人間世界に生まれた、直線的(二者択一的)思考と、そこでの右回りの脳。心(原因)の無さと非人間性に支えられるそれは、数万年前に始まった嘘の人間のその典型であり、形あるものを作り出す際も、彼らは、その右方向へのねじれや回転を主として、そこに在る歪な生の姿を見えなくさせる。数(量)の力で質を無視するという、人としてのあり得なさも、右回りの脳を基とするからである。

どちらかの方向というわけではないが、より地球を感じ、地球との一体感を普通とする原因でいるために、磁気と電気の流れを、地球自然界のそれとする。左回りの電流の原因を自らと融合させ、左ねじれの磁力(線)を生の原因に取り込む。(この数百年の間に固められた)非地球的な原因の流れから離れるその姿勢は、厳しいながらも、変化の次元を高め得るものになる。遺伝子レベル(の次元)から非生命的な回転を普通とする存在たちも、その生の基本形となる、滞りや腐敗の原因を形にする力を無くす。

4.いくつかの確認作業の時を経て、新たな変化と更なる進化を重ねつつ、そのまま為し得る EW の質(次元)を高めてきた、これまで。そしてさらにと触れた、太陽の自転が遅くなる原因となった黒点のその下地が生まれる程の出来事。太陽が初めて経験したそこでの不自由さは、この地球での、それま

でに無いある動きが活発化した時と重なり、そのことの確認作業が、ここから始まる。それは、かつて彼らが地球のために力を尽くしたその原因を、無有日記が、この現代仕様に活かすというもの。彼らも、この時の訪れを嬉しい。

全ての基であり、全ての変化に連れ添う微生物。地球は、彼らを通して生き存え、動植物たちも、彼らの力で生を繋ぐ。それでも放っては置けない状況が在ったために、人間が登場したわけだが、人間による、人間にしか出来ない、事の在り様のその原因の浄化の時を経て、微生物たちは、自らの方向性のその軸足を、この「復活」の流れに合わせる。全てを受容し、ありのままを繋ぎ、そして全てを生かしてきた微生物。その基本形は4章でのそれをそのままとするが、この時、その質の次元を変え得る人間の意思とその力に添い、新たな時を地球のために創造する。

微生物の登場は、木星近くの小惑星帯がそこで存在し得てしまうというその理由となる出来事が(何百万年もかけて)繰り返し起きた、およそ33億5千万年前。地球は、無限無数の次元を備えた生命として、彼らの誕生を生み出し(迎え入れ)、創造と変化そのもののその限り無い能力を地球の意思に重ねさせて、共に生きる。彼らの生の原因は、そのまま地球。人間の生の次元を遥かに超えたところで、彼らは、地球と太陽を繋ぎ、地球を守り、地球を生きる。

5.微生物の本当の姿は、磁気。現代におけるそれへの認識